

教材としての『論語』 ↓ 「学ぶ自分自身と向き合う」教材

← 教員こそが最も厳しく児童生徒に評価される教材

常に「人格」の向上を求めるのが「儒家」の思想

・ 之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり。

◀ 義を見て為ざるは勇無きなり。

◀ 力 足らざる者は中道にして廃す。女は今 画れり。

・ 之を知るものは之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず。

原則一 「自分は隠せない」

子曰、「視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉。」（第二「為政」篇 第十章）

子曰はく、「其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察れば、人焉ぞ廋さん。人焉ぞ廋さん。」

* 以下に載せるのは、すべて漢文学（中国文学）研究者による現代語訳です。

どの訳が、孔子の言葉として、しつくりと納得できますか。

①その人の行動を観察し、ついでその人の行動の動機を調べ、さらにその人がその行動に安んじているかをどうかをさぐる。この三つをやれば必ずその人物の正体は明らかになるものだ。

②その人のふるまいを見、その人の経歴を観察し、その人の落ちつきどころを調べたなら、その人柄はどんな人でも隠せない。

③その人物の日常生活の現在をしつかりと視る。その人物が経てきた過去を觀めみる。その人物が落ち着こうとしている未来の着地点を察する。そうすれば、その人物は自分を隠すことはできぬ。本当の姿がわかるわな。

④その実際の行動を見つめ、頼りとする所を見つめ、心安らぐ所を見つめれば、その人柄は自ずと明らかになる。隠し通せるものではないのだよ。

原則二 「直」な「心」を「行」うことが「徳」＝自分

「惠」（本来の字形）↓「徳」（変化した字形）↓「徳」（現在の字形）

子曰、「徳不孤 必有鄰。」（第四「里仁」篇 第二十五章）

子曰はく、「徳は孤ならず、必ず鄰有り」と。

先生は、「徳というものは、孤立しない。必ず寄り添ってくれる人がいる」とおっしゃった。

原則三 目先の評価の否定

子貢問曰、「郷人皆好之何如。」子曰、「未加也。」「郷人皆惡之何如。」子曰、「未可也。不如郷人之善者好之、其不善者惡之也。」（第十三「子路」篇 第二十四章）

子貢問ひて曰はく、「郷人皆之を好せば何如」と。子曰はく、「未だ可ならざるなり」と。「郷人皆之を惡まば何如」と。子曰はく、「未だ可ならざるなり。郷人の善き者は之を好し、其の善からざる者は之を惡まんには如かざるなり」と。

子貢が、「村の人がみんなほめてくれるというはどうでしょう」と尋ねた。先生は、「まだまだね」とお答えになった。「それではみんなから悪く言われると言うのはどうでしょう」と重ねて尋ねると、先生は「まだまだだね。善い者からほめられ、善くない者からは悪口を言われるというのには、とても及ばないよ」とおっしゃった。

原則四 「自分に恥じない」が求められる人間への信頼が前提

子曰、「巧言令色足恭、左丘明恥之。丘亦恥之。匿怨而友其人、左丘明恥之。丘亦恥之。」（第五「公冶長」篇 第二十五章）

子曰はく、「巧言令色足恭なるは、左丘明之を恥ず。丘も亦之を恥ず。怨みを匿して其の人を友とするは、左丘明之を恥ず。丘も亦之を恥ず」と。

先生は、「巧みな言葉で相手に調子をあわせたり、にこやかな顔つきで相手の顔色をうかがったり、無理にへりくだった態度で相手を持ち上げたりすること、あの左丘明さんはそんなことを恥じた。私もまた同じだ。嫌いなのにその心を押して隠して友達のようにつきあう。左丘明さんはそんなことを恥じた。私もだね」とおっしゃった。